

刀剣の歴史と思想

第14回

酒井 利信

修験道と剣

私たち、今、**信仰の中の刀剣思想**というフィールドを歩いているが、日本の信仰宗教はやはり仏教を抜きにして考えることはできないだろう。日本の武は、後世、仏教、特に禅との密な関係を保ちながら発展したが、意外なことに刀剣の思想が仏教の中で際立つて展開することはない。刀剣を神聖視する思想は、やはりこれまでみてきたように神道色が強いのであるが、これが特に中世期以降、仏教と融合して成立した**修験道**という信仰において、重要な展開をみせる。唯一、仏教色の窺われる刀剣思想といえるかもしない。

今回は、ここに注目していきたい。

▼▼修験道とは

修験道といつても一般的には馴染みが薄いが、ここではまず修験道とは何かということを理解することからはじめておきたい。

日本では、古来、深い樹叢におおわれた険しい山々は神靈のすむ他界であり、日常生活の場とは区別されるものであった。山

は神々のすむ聖地であり、古くからここでアニミズムやシャーマニズムといった要素を多分に含んだ、神道的山岳信仰がはぐくまれてきた。これが修験道のベースになつていて。こういった信仰に、仏教、特に最澄・空海がもたらした密教が融合して、中世期になつて成立したのが修験道である。

仏教は六世紀に日本に伝えられたが、日本における受容のされかたというのは、仏



刀剣の歴史と思想

修驗道と剣

道教 + 仏教6C = 神道
福永光司 = 修驗道
神仏習合



役小角像（檀特山小松寺蔵）

小角は葛木（城）山に住み、呪術をよく使うので有名であつた。外從五位下の韓国連広足の師匠であつた。後に小角の能力が悪い方に發揮されて、妖術で人を惑わして

はじめ小角、葛木山に住みて、呪術を以て称めらる。外從五位下韓國連広足が師なりき。後にその能を害ひて、讒づるに疑惑を以てせり。故、遠き処に配さる。世相伝へて云はく、「小角能く鬼神を役使して、水を汲み薪を探らしむ。もし命を用ゐずは、即ち呪を以て縛る」といふ。

教が後に神道とよばれるようになる従来の信仰にとつてかわつたり、あるいは神道とは別に仏教は仏教で独自の路線を歩んだりといったものではなかつた。日本古来の神への信仰と、いわゆる輸入されてきた仏教は、奈良朝前後から交流をもち、平安時代にはお互いが融合するような関係を作りあ

げていつた。いわゆる神仏習合である。この神仏習合の最たるもののが修驗道である。以上が、修驗道の一般的な理解であるが、さらに仏教以前に神道そのものに道教の影響があつたことにも注意しておきたい。これについては福永光司氏が指摘するところである。⁽¹⁾

修驗道の開祖は、伝説の行者である役小角とされている。役行者をみるとことにより、修驗道の性格がより具体的に理解できる。

「續日本紀」文武天皇三年（六九九）五月二十四日条に登場する。

▼▼修驗道の開祖

役小角



呪術

いるという謡言があつたため、遠隔の地（伊豆嶋）に流罪となつた。世間のうわさによれば、「小角は鬼神を思うままに使役して、水汲みをさせたり薪をとらせ、もし この命に従わないときは呪術で縛つた」といわれている。

並はずれた能力をもち、それが人目を引くようになれば謡言は世の常である。本稿において、このことにあるべき重要なことは、修驗道の開祖が山に住み、鬼神をも使役するほど

の呪術をつかつたということである。

役小角については、奈良薬師寺の僧景戒が著したといわれる最古の仏教説話集『日本靈異記』にも記されている。

毎に庶ハクハ五色の雲に挂りテ、沖虚の外に飛び、仙宮の賓と携り、億載の庭に遊び、藁蓋の苑に臥伏し、養性の氣を吸ヒ噉ふことをねがふ。

（役小角が）常に願つたことは、五色の雲にのつて大空を飛び、仙人の宮殿で賓客とともに一億年たつてもかわらぬ庭に遊び、

花園にいこい、養生の氣を吸うことであつた。

ここでは、小角が、不老不死を獲得し虚空を自由に舞うことのできる仙人になることを願つていたことが述べられている。ここに述べられている内容は、明らかに中国道教における神仙思想の影響を受けたものである。

さらに『日本靈異記』の記述は、次のようにつづく。

所以に晩レニシ年四十余歳を以て、更に巖窟に居り、葛を被、松を餌み、清水の泉を沐み、欲界の垢を濯キ、孔雀の呪法を修習し、奇異の驗術を證し得たり。鬼神を駆使ひ、得ること自在なり。

（仙人への思いのため）四十歳を超えてなお、岩窟に住み、葛を着物とし、松の葉を食べ、泉の清水を浴びて世俗の垢をすすぎ、孔雀明王の呪法を修めて不思議な驗術を得た。鬼神を使役することも自在であった。以上のような内容である。

この後、小角が、海上をまるで陸を行く

がごとく走り、鳳凰のように飛び、葛木（城）山の神である一言主神をも呪法で縛つたことなどが記述されている。

ここにあげた記述では、これほどまでの験力を得るためには、山中での激しい苦行が必要であったことを物語ついている。

この様子は、古代朝鮮の花郎であつた金庾信の伝説と共通するものがある。花郎が道教系統の思想をもつことは、すでに述べてきた。

『日本靈異記』において、役小角のことを在俗の仏教信者をさす優婆塞といい、その役行者が密教系の祈祷法である孔雀明王の呪法を修めるなど、まさに仏教との習合が語られているが、一方、その根底には確かに中國道教からの流れがみられる。

修驗道は、この役小角を開祖とし、こういった山中での修行を前提としながら呪術活動を行うものであるが、ここには古代中國道教から朝鮮の花郎、そして修驗道へとつながる呪術の大きな流れが存在する。

しかし役行者が、この流れの中で剣を用いた呪術を行つたかどうかはわからな

修驗道 ← 花郎 ← 道教



刀剣の歴史と思想

修験道と剣

▼▼不動明王と智慧の剣

修験者⁽⁵⁾とは、端的にいえば開祖である役小角と同様に呪術活動を行うシャーマンである。人々に災いをまねく邪神や死神、動物霊などを呪術により排除する。これを調伏⁽⁶⁾という。

しかし、修験者たちはもとよりこういった調伏をおこなう能力を備えているわけではなく、呪術をおこなう能力を得るために、つまりシャーマンとしての資質をそなえるために、これも開祖と同様に聖域である山の中での修行をする。

山中を歩き続ける回峰行⁽⁷⁾や断食・断水・不眠・不臥の行など、その苦行たるや想像を絶するものがある。修験道というのは単に過去の宗教ではなく、現在でもそういった苦行をつづける行者はたくさん存在している。近年、千日回峰行を満行して注目を集めた阿闍梨⁽⁸⁾などは、その代表である。古代に話をもどすと、古代の信仰宗教には、呪術のほかに神への信仰があることは指摘されるところであるが⁽⁹⁾、古代における山岳信仰において呪術活動のほかには自然神や祖先神といった神道的な神々への信仰があつたことは確かであろう。しかしこれが中世にいたつて、日本固有の神々に

加えて外来の尊格が加わっていく。

修験者の主な崇拜対象の一つに、不動明王⁽¹⁰⁾があげられる。仏教の尊格である。

鎌倉前期の説話集『宇治拾遺物語』には、比叡山回峰行の開祖といわれる相応和尚が、葛川の滝で修行をしていたときに、不動明王の頭にのつて都卒天にいつたといふ話がのせられている。不動明王は、平安時代末期から鎌倉時代には修験道の主要な崇拜対象となつていたようである。

刀剣の思想ということを考えた場合、この不動明王に対する信仰が非常に重要である。

不動明王とは恐ろしい形相をし、片手に

呪術
・
神への信仰
↓
不動明王信仰
(平安末～鎌倉)





「不動經」というものが
ある。これには、「是大
明王は大威力有り。」
略——大智の剣を執つ
て食贊癡を害し、三昧の
索を持して難伏の者を縛
す」(この大明王には大
きな威力がある。)——略
——智慧の剣を執つて
貪瞋癡の三毒を断ち、心
が統一された三昧の力を
もつ索を手にして調伏
するのが困難なもの縛
する)と記されている。

羅索で縛し、智慧の剣を
もつて外敵や内なる煩惱
を打ち倒すこと、つまり
調伏が、この仏の主要な
働きである。

調伏の機能は、不動明
王の主たる特徴である。
そしてこの調伏を成し遂げるのが、所持す
る智慧の剣である。このことから智慧の剣
は、不動明王そのものを象徴するような存

降魔の智劍をもち片手に羅索をもつ仏であ
る。もともと中国では、不動明王や朱雀明
王といった明王といわれる仏たちは、呪的

な降伏力をもつ密教特有の忿怒の仏たちを
いつた。

広く行者の間で誦誦されるものに『聖

不動明王(調伏の機能)の象徴

↓
智慧の剣



刀剣の歴史と思想

修験道と剣

在になつていく。後世、刀剣に、智慧の剣を簡略化した形象を彫りこんだものをよく見かけるが、これだけで不動明王を表しているという。智慧の剣は、それほどまでに不動明王の象徴的な存在である。

ここに、刀剣の思想の仏教的展開がみられる⁽³⁾。

▼▼山伏と不動明王

修験者のこととを山伏⁽⁴⁾というが、これは山の中での修行をし、それによつて得られた呪力で調伏を行うという意味である。

邪鬼や死靈、惡靈、狐狸、荒神、生靈などを調伏する呪術活動を行つてゐる修験者、つまり山伏には、独特の思想がある。呪術活動の大前提として、崇拜対象である不動明王と一体となる、そう観念することである。

調伏にあたつて「不動はすなわち我であり、我はすなわち不動である。本尊の御心がわが身にはいり、わが心が本尊の身にはいる。本尊と我と二つに別れることはなく

一身である」と観想することが行われるという。

また、修験者の装束はそれぞれに意味をもつが、彼らは衣体から不動明王と一緒ににならうともする。

『渓嵐拾葉集』には「問。山伏の行

体はどういつたものか。答。不動の形体である」といった記述があるが、これはそのことを表している。

さらに、装束によつて不動明王と一体化しようとする思考は、「山伏問答」に

もうかがうことができる。修験道の儀礼には、多くの修験者が集まって屋外で護摩木を焚いて本尊に祈る護摩があるが、その際に「山伏問答」とい



関西一円の修験者が集まる伽耶院の大護摩（兵庫県三木市）

うものが行われる。修験者として知つていなくてはならないことを問答し、護摩儀礼に加えるべき者かどうかの判断をする。た



刀剣の歴史と思想

修驗道と剣

とえば「そもそも山伏の二字の意味はなにか」との間に、「山伏とは山にはいり無明煩惱の敵を降伏するという意味である」と答える、といったものである。その山伏問答のなかで「腰におびた利剣はなにか」との間に、「不動明王の智剣であり、煩惱魔障を破断するものである」と答える部分がある。

山伏は柴打しばうちという剣を持つが、この剣は不動明王のもつ智慧の剣と一緒であるということである。そう観念することによって、彼らは不動明王と一体になろうとする。そういうことによつて山伏は、不動明王と同様に、調伏の呪術活動ができるという思想である。

（註）

修驗道でいう調伏は、まさしく邪を辟ける呪術である。ここには中国思想から脈々と伝わる辟邪の呪術の系譜がある。修驗道における智剣による調伏は仏教の尊格である崇拜対象と一体となるところに特徴があつたが、この大きな流れの中で、信仰宗教にかかる刀剣思想の展開としては、これで行き着いたように感じられる。

していくこととする。

修驗道でいう調伏は、まさしく邪を辟ける呪術である。ここには中国思想から脈々と遭遇し、その遺骸が独鉛と剣を握つていたという伝説があるが、これが当初の役行者の姿を忠実に表しているのか、後の創作であるのかは定かでない。

（5）修驗道の行者。

（6）（じょうぶく）とも読む。「自らの身心を制御して悪を排し、対外的には敵意ある者を教化して悪心を捨てさせ、障害をもたらすものを降伏させること」（中村元『佛教語大辞典』東京書籍、一九八二）。

（1）福永光司『道教と日本文化』人文書院、一九八二

（2）福永光司『道教と古代日本』人文書院、一九八七、ほか。

（3）和歌森太郎『山岳宗教の成立と展開』（山岳宗教史研究叢書1）名著出版、一九七五

（4）役小角が大峰山で自らの前世の遺骸と遭遇し、その遺骸が独鉛と剣を握つていたという伝説があるが、これが当初の役行者の姿を忠実に表しているのか、後の創作であるのかは定かでない。

るが、これは道教書である『抱朴子』にみられる。

（4）役小角が大峰山で自らの前世の遺骸と遭遇し、その遺骸が独鉛と剣を握つていたという伝説があるが、これが当初の役行者の姿を忠実に表しているのか、後の創作であるのかは定かでない。

（5）修驗道の行者。

（6）（じょうぶく）とも読む。「自らの身心を制御して悪を排し、対外的には敵意ある者を教化して悪心を捨てさせ、障害をもたらすものを降伏させること」（中村元『佛教語大辞典』東京書籍、一九八二）。

（7）和歌森太郎『山岳宗教の成立と展開』（山岳宗教史研究叢書1）名著出版、一九七五

（8）宮家準氏によつて、修驗道思想において、不動明王の智剣にさまざまな神や仏が籠るとする思想があつたことが報告されている。

（9）宮家準『大峰修驗道の研究』俊成出版社、一九八八

（10）修驗者が九字の修法において、「臨_{りん}兵闘者皆陳烈在前」の九つの呪を唱える。非常に独特な思想であるが、実はこれが後に剣術の世界にも影響を与えていくことになる。これについては稿を改めて紹介

